

## ○作曲にあたって

折井清純

横田早紀江さん原作

「めぐみ、お母さんがきっと助けてあげる」より



私としましては誠にありがたいことに、毎年のように両角先生よりご依頼を頂き朗読とマンドリンオーケストラのための作品を作曲する機会を頂いておりますが、今回は特に大変な題材を頂き、本当に頭を悩ませました。

この、日本人の誰もが早期の解決を望んでいる誠に理不尽極まり無い問題を、早紀江さんの手記により改めて思い起こした時、これに音楽を…などとは、とてもとても考えられるものではありませんでした。朗読の伴奏となる音楽を作ろうとした時には、ある意味では商業音楽的に何らかの意図を持ってここは「明るく」とか「のどかに」とか「悲しく」とか「暗く」とか、誠に不躰ながら「ここはぜひ感動を呼びたい」などと、ある程度は作為的な作業にならざるを得ません。ですが、今回のこの題材に、そのような気持ちを抱くこと自体が「人としてどうなのか？」と置いてしまいます。「悲しく」「辛い」に決まっている、またそんな単純な言葉では表せない、どうしようもない「怒り」など、そもそもこの文章には音楽を伴うべきではない、とも思いました。そこに音楽を作ろうとする行為が、果たして早紀江さんと共に解決を祈るべき者の姿なのか？…と。

ただそのように悩んでいる内に、もしかすると、この演奏会の場でさえも音楽と共にこの問題を取り上げる場として少したりとも風化させないで世に訴え続ける機会にしなければならぬのではないかと、とも考えるようになり、「私たち音楽に携わる者が何かできるのか？私たちにできることをやろう！何とか作らなくては！そして、それならば早紀江さんの文章が、より皆さまの心に響くよう、早紀江さんの祈りに寄り添える音楽となれば…そのことを作曲の意図としてみよう！」と自分自身に言い聞かせるに至りました。文中にある巨匠シューマンの力も借り、できるだけ「涙、涙、涙…」だけにはならないようにしたい、そして音楽が問題解決への祈りの一助となつてほしいと願いつつ…。

どうか、皆さま、この作品では、音楽よりも朗読の一言一言に耳を傾けて下さい。